ZENFUREN
全国国立大学附属学校連盟・全国国立大学附属学校PTA連合会
附属だより 第112号
全附連ホームページ http://www.zenfuren.org/
全附P連最新情報 https://www.facebook.com/全国国立大学附属学校PTA連合会-535185576863562/

～子どもたちとこの国の未来のために～

第112号 LINEUP

全附P連 PTA研修会
第９回全国大会を開催　2～4面

寄稿
国立大学附属学校に求めるもの
新潟県長岡市教育委員会　教育長
高橋　譲 氏　9面

寄稿
これからの運動部活動の在り方
～学校と地域を結ぶプラットフォームとしての運動部活動～
大阪教育大学附属高等学校平野校舎
教諭
松田雅彦 氏　11面

附属トピックス　10面
■「竿燈まつりを通じて」
秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
■「ダンス甲子園出場」
愛知教育大学附属高等学校
■「東京2020マスコットがやってきた！」
福岡教育大附属福岡小学校

全附P連 絵画コンクール2018
未来の私、未来のこのまち　5～7面

第10回 附属OB訪問
中田敦彦氏
呉本会長
対談　8面

カンガルー保険 新制度のご紹介　12面

附属OB訪問PLUS（筑駒医師の会・山本晴章氏、内閣府参事官補・平田菜摘氏）9面
第10回全国大会ご案内・カンガルーシップ活動・編集後記…12面
その他の紙面

ご挨拶

改革の原点は「子供のために」

全国国立大学附属学校連盟
理事長 藤原 嘉文
（山梨大学教育学部附属中学校校長）

初秋、研究出張でニューヨーク、ボストンに滞在しました。久しぶりのアメリカでしたが、日本人学生の少ないことに驚きました。昨今、日本の若者が海外へ行かなくなったと言われて久しいですが、現地へ行くと本当にそれを実感します。色々な理由はあると思われますが、やはりこのままの状態が続けば、日本は世界から取り残されるのではないかと危惧します。

さてご案内の通り、これからの少子化に向けて、国立大学附属学校園は、その存在意義・役割・特色を明確にし、それらを踏まえた改革が求められています。

国費を投入している組織ですから、情勢の変化によってその在り方の見直しが求められるのは当然ですが、その原点は「子供のために」。つまり、改革や先進的な取組が、結果的に子供のために良いものになっているかどうかが重要であると思います。振り返ってみますと、多くの附属学校園がそれぞれの地域のリーダーとなりうる人材を育ててきたことはまぎれもない事実です。そのように将来広い世界で羽ばたけるような子供たちの資質・能力を育むこと。そのために大学の教育研究資源を十分に活用すること。そのノウハウを地域へ還元すること。これらも大切な使命の一つではないでしょうか。

今後とも、全附連の活動にご支援のほど、よろしくお願い致します。

「三位一体の改革」と「エリート2・0」の推進

全国国立大学附属学校PTA連合会
会長 呉本 啓郎
（大阪教育大学附属高等学校平野校舎）

今、全国の国立大学附属学校は、時代に合わせた世の中の期待に応え、より公益的・公共的な存在となるべく大学・学部とともに様々な改革に取り組んでいます。この改革には大学・学校園・保護者が三位一体となって取り組むことが肝要であり、また、そうでなければ本当によい改革は成し得ないと考えます。私たち保護者は附属学校の社会的使命について、今一度、再認識し、国家百年の大計である教育の分野において、我が国の公教育を支える附属学校がよりいきいきとその使命を果たし、私たちの子どもや孫たちの住む未来が明るく豊かなものであることをベクトルとする観点をもって、目の前の子どもたちとこの国の未来のために、この改革に協力していきたいと考えます。

そして、同時に附属学校のよいところについて、しっかりと発信し、周知をはかり、守っていくことがとても大切だと考えます。

①主体的かつ能動的に行動し、自己の使命や責任を意識できる人。
②他者を理解し、思いやる心を持つ人。
③個々の個性を尊重し、インクルーシブな思考を持つ人。
④地域や国に対し、郷土愛を持つ人。

これらの人の姿は校園種を問わず全国の附属学校がこれまで長年にわたり大切にしてきた総合的人間教育を通じて育成してきた人の姿そのものであり、まさに次世代の地域や国のそれぞれコミュニティーにおいて広く多く必要とされている人の姿であると考えます。弊会ではこれを次世代に求められる真のエリートの姿…【エリート2・0】として定義し、全国の附属学校がその長い歴史の中で蓄積してきた知見やノウハウなどを、今後、よりいっそう我が国の公教育に役立てていき、国立学校として、さらにその公益性・公共性を高めていくことを願って発信してまいります。

全附Ｐ連ＰＴＡ研修会

第9回 全国大会

9月28日(金)～29日(土)
ハイアットリージェンシー東京

開催スローガン

子どもたちとこの国の未来のために ～今、求められる附属の「改革」と「周知」～

全附Ｐ連「PTA研修会第９回全国大会」がハイアットリージェンシー東京において２日間に渡り開催され、全国212校園、ご来賓等も合わせて約1000名が参加、基調講演やセミナー、分科会、情報交換会と文科省や産学連携PRブース、特別支援関連商品の販売等が行われました。

基調講演

スポーツが変える。未来を作る。

スポーツ庁長官　鈴木 大地氏

スポーツ庁長官に就任し、多くの人にスポーツに参画してもらいたいと活動しています。スポーツで健康な人生を過ごしてもらうことも目的の一つです。仕事や家事が忙しいことを理由にスポーツの機会が少ないのは問題です。

国民医療費の増加、これを抑えるには病気にならないことです。通勤や休憩時間でも運動をしていくこと、またスポーツに関心のない人へのアプローチだけでなく、ＩＴ、ビジネス、観光、文化、エンターテイメントと関係付けていくことも重要です。

中学校で身体を動かす楽しさに重点を置き学習指導要領を改訂、また「部活」の時間や実施日を抑えるガイドラインを設けました。

競技力向上のため、隠れた能力を持っている中高生を発掘して、アスリートとして育てていくプロジェクトを始めました。スポーツは世界に繋がることができます。私は人生をかける価値があると確信しています。スポーツにより人生が変わり、社会を変え、世界に繋がり、未来を創っていくものです。２０２０年以降もアスリートの社会貢献を通じてスポーツの価値を高めていきたいと考えています。

メッセージ

林芳正文部科学大臣メッセージ

林芳正文部科学大臣（当時）はビデオメッセージの中で国立大学の附属学校の実験的、先導的な学校教育の推進、特に教育実習の実施、大学・学部における教育の協力により、我が国の教育をリードするモデル的な取り組み、モデル校としての役割を果たしていることへのご評価をいただきました。

さらに「『子どもたちとこの国の未来のために』とのスローガンを掲げて、しっかりと活動なさっていることに敬意を表したいと思います」と全附Ｐ連の活動に対しても、エールを送られました。

林大臣は子どもたちに新しい時代に合わせた技術を身につけさせることが、一層重要になってきたと強調されました。そのことを前提に「附属学校のみなさんの果たす役割は、これまで以上に大きくなってくると期待しています」と附属学校のさらなる活躍にも言及されました。

また、文科省が大学の行なっている教育改革の優れた事例を紹介した教育の質向上への取り組み事例を取り上げ、「ぜひ、附属学校のみなさんと共有していきたい」とご評価いただきました。

講演　国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書を踏まえた全国の附属学校園の対応状況について

文部科学省 高等教育局大学振興課
教員養成企画室長
高田 行紀 氏

昨年８月末に「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書」が提出されました。課題として指摘された学部、教職大学院、附属学校間の連携強化について、パイロット的な取り組みなど附属学校はしっかりとできています。その中で附属学校の使命を果たすため、多様な入学者選考を実施することや、特色を出した学校づくり、大学や教育委員会との連携などです。早急に対応すべきこととしては、地域住民の参画、研究成果が公立校などで具体的にどのように活用されているかを把握することなどが指摘されました。

大学生が減少することが予想され、教員養成の強化・効率化を今から準備しておかなくてはなりません。附属学校についても、大学においては平成33年度までに一定の結論をまとめるよう求められています。

教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する取り組み事例として、青森県は平均寿命が短いことが問題となっていますが、弘前大学は附属学校園で地域の行政機関と連携し、健康教育推進事業に取り組んでいます。福井大学では、教職大学院の機能を附属学校のキャンパスに移設して、恒常的な共同授業研究を行っています。千葉大学は附属学校の教員が学部教員として授業を行う相互乗り入れを実施しています。高知大学においては専門家と連携し、特別支援学校卒業生の就労のため、菓子工房で商品開発などに取り組んでいます。

今後、地域・子どもたちがどのように変化していったかを発信していくことが必要です。附属学校園には、国が気づいていない未来を先取りする取り組みを期待したいです。文科省としても積極的に支援をし、現場で活発な意見交換をしたいと思います。

財政教育プログラムについて

財務省 大臣官房地方課
課長補佐
菅原 元樹 氏

財政教育プログラムは、子どもたちに日本の財政について興味を持ち、自分の将来について考えてもらうことが狙いです。

座学授業ではクイズや動画を活用し、子どもたちにも親しみやすい内容に工夫しグループワークではアクティブラーニングを導入し、国の将来を考えて、どのような予算編成をするかをシミュレーションしてもらいます。具体的には１００万円の予算をどう使うかを考えてもらい、最後に参政権の説明なども行います。

金融経済教育プログラムについて

金融庁 総合政策局 総合政策課
総合政策監理官
三浦 知宏 氏

金融庁は、これまで附属学校の小中高、特別支援学校において、金融経済教育の授業を実施して参りました。

授業は、お金について学ぶことは自分の将来のために必要であること、お金の持ち方や使い方の正しい理解を深めること、経済を支える金融の役割について考えてもらうことといった3点を中心に行っています。

今後の金融経済教育は、少子高齢化や仮想通貨など環境変化に合わせて教材の内容を充実させ、出張授業を拡大していきたいと考えています。

東京2020教育プログラム（よういドン!）を通じたオリンピック・パラリンピック教育の推進について

公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック
競技大会組織委員会 副事務総長
布村 幸彦 氏

東京２０２０オリンピック・パラリンピック開催まで2年を切りました。２０２０年の大会が日本の社会を変えるきっかけになるよう、取り組んでいきます。

アスリートだけでなく、スタッフ、ボランティアが最高のおもてなしを行い、宗教・人種の違いを超えて、調和のとれた共生社会を作るきっかけになることを期待しています。また、オリンピック、パラリンピックを見た子どもたちが、選手たちの力を感じ学びとる事で、失敗を恐れず自ら行動を起こす人材、将来に向かって自信と勇気を兼ね備えた人材へと成長できるような大会にしたいと思います。

分科会1

障がいを知り、共に生きる
～あいサポーター研修～

分科会1では「障がいを知り、共に生きる～あいサポーター研修～」が実施され、新たに105名があいサポーターに認定されました。今回は、国立特別支援総合研究所から北川貴章主任研究員をお招きし、助言指導をいただきました。この連携によって、あいサポート運動の推進がより強力に実現できるようになりました。

分科会2

学校の諸問題
～子どものいじめ問題・教師の働き方改革について～

分科会2では、WYSH教育という手法の授業を全国に広めておられる木原先生に講演いただき、いじめを減らす為に「自尊感情育成」の他、親や先生そして地域が子どもに寄り添う事の大切さをお話しいただきました。また参加者によるディスカッションでは「親同士の繋がりも大切」等たくさんの活発な意見が出ました。

分科会3

スマホ時代の子どもたちのために
～インターネット利用に係るトラブル防止のためにPTAができることを考える～

兵庫県立大学環境人間学部准教授の竹内先生に今の子どもたちがどのようにスマホを利用しているかを講演していただきました。また現役高校生にパネリストとして参加していただき、今の高校生の実態と彼らの考えを話していただきました。

幼稚園部会

附属幼稚園をめぐる最近の情勢、今後の展望

宇都宮大学附属幼稚園の統廃合の経緯、北海道教育大学附属函館幼稚園の預り保育の報告と、文京区立お茶の水女子大学こども園、附属幼稚園の未来の講演を行いました。

附属幼稚園の抱える問題を共有し、有意義な情報交換ができました。

特別支援部会

ありのままを見つめよう　ありのままをつなげよう
～芸術の観点から～

弘前大附属特別支援学校 前校長の岩井康頼先生に「芸術文化活動を通して多方面から探る知的障がいの子どもたちの可能性について」ご講演いただき、様々な視点から子どもたちの育ちや生きがい、卒業後の支援について情報交換。また、パラスポーツ交流大会の紹介もあり、芸術文化活動が子どもたちの生きる力を育み、潤いのある充実した生活に非常に重要であることを学びました。

教育後援会長会

教育後援会の寄付に関する活動について

寄付金額の増加を目的に、それまで未発行であった寄付金控除の為の領収書発行について大学へ依頼した経緯と、その継続の必要性、また領収書発行の際の税務署と学校との協議の重要性と税額控除についてお話がありました。さらにファンドレイジング協会より寄付文化の薄い日本における現状と取組について説明をいただきました。

大会スケジュール

第1日　9月28日（金）

9:30	10:00 Ⅰ	11:30	開会(12:30) Ⅱ	14:15	14:35 Ⅲ	15:50	16:20 Ⅳ	18:00	18:30 Ⅴ	20:30
受付	オプションプログラム 教育後援会基本セミナー	昼食	受付	開会行事 基調講演 鈴木 大地 氏（スポーツ庁長官） スポーツが変える。未来を創る。	休憩	附属セミナー1	休憩	テーマ別分科会1～3 幼稚園部会 特別支援部会 教育後援会会長会	休憩	情報交換会

〈パネル展示〉絵画コンクール入賞作品・特支記念品展示

第2日　9月29日（土）

8:15	8:45 Ⅵ	10:30	10:50 Ⅶ	閉会(12:45)	13:00 Ⅷ	14:30
受付	附属セミナー2	休憩	クロージングセミナー 茂木健一郎 先生 脳科学から見た、これからの学び、附属の可能性		オプションプログラム 幼稚園、特別支援希望者対象 ランチミーティング	

〈パネル展示〉絵画コンクール入賞作品・特支記念品展示　13:30 展示終了

講演

鳥取県知事　**平井 伸治** 氏

「あいサポート運動」と共に生きる

平井知事はあいサポート運動のみならず、様々な鳥取県の魅力ある地域社会づくりに尽力されており、「すなば珈琲キャンペーン」や鳥取砂丘での「ポケモンgo大会」、二つの空港にマンガ・アニメの名前を付けたり、県名を田舎で星空がきれいな事から「星取県」、カニの季節には「カニ取県」に変えるなど、ユニークなPRを展開され、自県に無いことや足りないことを逆手に取った素晴らしい発想とアイディアからは、我々も多くの気づきと学びをいただきました。

附属セミナー2の講演では、あいサポート運動の創始者である鳥取県平井伸治知事にご講演いただきました。

学生時代のボランティア活動で障がい者支援に携わった事をきっかけに、障がい者が暮らしやすい地域社会の実現を目指し、あいサポート運動を創設したこと、全国で初めて手話条例を施行したこと、さらに、共生社会の実現のために「あいサポート条例」までも施行したことを話されました。また、日本の教育のキーワードは「ダイバーシティ（多様性の理解）」であり、障がい者理解のための教育の大切さについても述べられました。

情報交換会

約800人の参加者のもと開催

大会1日目の最後には、日本教育大学協会 出口会長、公益社団法人 日本PTA全国協議会 東川会長、また文部科学省をはじめとする関係省庁や全附連、各関係各所から約90人のご来賓を迎えた情報交換会が開かれ、財務省 大臣官房地方課長の谷口眞司様の乾杯を皮切りに、闊達な情報交換、意見交換が行われました。限られた時間ではありましたが、参加いただいた皆さまから「とても有意義な時間だった」との感想もいただきました。

第1日目速報〈附属だより号外〉発行

大会2日目の茂木健一郎氏の講演後、昨日の第1日目の速報として〈附属だより号外〉が配布された。今回の号外は、昨年度の附属だより110号にて「知ってほしい附属学校の良さ」としてご寄稿をいただいたジャーナリストの斎藤 治 氏に開会から講演、情報交換会までの取材をいただき、全附P連各委員会からの分科会報告と合わせて広報委員会より発行したもの。

大会開催中の号外発行は3年ぶり。

第９回全国大会 クロージングセミナー

●本講演　●シンポジウム

脳科学から見た、これからの学び、附属学校の可能性

脳科学者 ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー

茂木 健一郎 氏

・本講演

第９回全国大会の最後のプログラムとして、「子どもたちとこの国の未来のために」のテーマのもと、クロージングセミナーが、「本講演」と「シンポジウム」の２部構成で開催されました。

まず、「本講演」では脳科学者の茂木健一郎先生に『脳科学から見た、これからの学び、附属学校の可能性』と題してご講演いただきました。茂木先生は東京学芸大学附属高等学校の出身であり、導入では当時の思い出に残るエピソードを話されました。その当時の思い出が披露され、ユーモアを交えた話しに引き込まれていきました。附属学校に対する深い思いも感じられ、各附属学校園には、長年積み重ねたそれぞれのスクールカラーを大切にして欲しいとエールをいただきました。

茂木先生は、教育について、外国と比較され日本では偏差値とペーパーテストを重要視しますが、アメリカではインタビュー（面接）を重要視することを指摘され、詰め込み型の暗記の学習ではなく、クリティカルシンキングを磨くことが重要であると説明されました。「国技である相撲」や「わびさび」など日本には外国に発信できる素晴らしい文化があり諸外国より最近注目されていることを紹介されましたが、逆に、教育においては危機的状況であることを危惧されていました。明治維新の頃のように、現在の日本人は果たして最先端の教育や知識を一生懸命学ぼうとしているのか、その意識改革が必要と感じました。

さらに、文部科学省・教員・保護者に対しては常に教育に関してベストプラクティスを学び続けて欲しい、現代の社会では常に学び続けないとすぐに遅れてしまうと警鐘を鳴らされておりました。

卒業してありがたみが分かる、附属学校はそんな学校であって欲しいとの言葉が印象的でした。

・シンポジウム

後半のシンポジウムは、全附Ｐ連の呉本会長がコーディネーターを務め、パネラーに講師の茂木先生、連盟副理事長の吉田先生、文部科学省の髙田室長、コメンテーターの春川氏の４名のメンバーで、専門家と現場の教師と行政と世論の代弁者としてのそれぞれの視点からの意見によりシンポジウムが進められました。

附属の活用・周知、公共性など活発に議論〈シンポ〉

まず、１つ目のテーマとしては附属学校園のイメージとして「エリート教育」がネガティブに取り上げられるが、「真のエリート教育」、言葉を替えると「リーダー教育」は昔から附属学校園が取り組んできたことであると吉田先生から説明がありました。茂木先生もリーダー教育の必要性に賛同され、その結果としての新しい教育のあり方は他の公立校にも普及させ水平的に拡散することが必要と述べられました。国立大学附属学校園をなくすということは国が教育の方向性を示すことを放棄することだとの指摘があり、また、限られたパイの取り合いをしないで、附属の卒業生が新しい価値や方法を作り出すことにより、社会に還元できれば、附属学校はない方がよいとの考え方にならないと提言がありました。春川氏もリーダー教育や専門特化した教育は現在の日本では必要とされており附属学校はそれを積極的に進めるべきだと述べられました。髙田室長は、行政の視点から、茂木先生の講演を受けて、世界で大学ランキング上位ばかりが注目されるが、実はそれぞれの多様な特色が重要であり、例えば国立大学附属学校園には他の国から視察が来ており注目されていることを説明され、また、現在選抜試験などの是非も問われているが、例えばディスレクシア（発達性読み書き障がい）の方の受け入れなど、今後実験校として附属学校園の新しい試みに対する期待の言葉をいただきました。

次にもう１つのテーマとしては、附属学校園の「周知」が上手くできていない点について意見交換が行われました。茂木先生からは本気で良い教育を開発・実践すべきで、それを水平的に広げ、コミュニティーをつくれば、このコミュニティースクールのモデルが時代の最先端であると説明がありました。春川氏からは、附属学校園は、先進教育で専門特化して良い先生をどんどん公立へ輩出し、その方法を公立が真似できるようになれば、附属学校園の公共性は高まっていくとの意見がありました。また、髙田室長からは、グットプラクティスを実践しその成果を社会に広げていって欲しいとの意見をいただきました。

いろいろな立場からのご意見をお聞きし、今後の附属学校園が進むべき方向性を示唆していただいたように思われます。

最後に、全附Ｐ連の三浦研修担当副会長より大会宣言がなされ、宮永研修委員長の閉会宣言で、２日間に渡った全附Ｐ連ＰＴＡ研修会第９回全国大会が閉会されました。

（板倉雄一郎）

〈パネラー〉
茂木 健一郎 氏　脳科学者 ソニーコンピュータサイエンス 研究所シニアリサーチャー
吉田　　隆 氏　全国国立大学附属学校連盟　副理事長
髙田　行紀 氏　文部科学省 高等教育局 大学振興課 教員養成企画室長
春川　正明 氏　讀賣テレビ放送株式会社 報道局 解説委員長
〈コーディネーター〉
呉本　啓郎　　全国国立大学附属学校PTA連合会　会長

展示コーナー　ＰＲブース　販売ブース

展示コーナー

９月24日に茨城大学附属４校園の主管により開催された「絵画コンクール2018」入賞作品、特別支援学校による大会記念品製作風景パネル並びに大会記念品の展示が開催されました。

ＰＲブース

大会会場前では各省庁等から下記PRブースの出展をいただきました。

〈文部科学省〉
・初等中等教育局 児童生徒課
「いじめ問題への対応」
・生涯学習政策局 社会教育課
「土曜学習応援団」
〈内閣府〉
・子供の貧困対策推進室
「子供の未来応援国民運動」
・知的財産戦略推進事務局
「知財創造教育推進」
〈財務省〉「財政教育プログラム」
〈総務省〉
・近畿総合通信局
「インターネット・リテラシー教育」
〈カンガルー保険〉
〈産学官連携関連〉

販売ブース

大会期間中、特別支援関連製作品および全附連グッズや書籍の販売が行われました。

特別支援関連では、千葉大学教育学部附属特別支援学校卒業生が通所する「あおぞら園・あけぼの園」、筑波大学附属大塚特別支援学校の親の会を母体とする「工房わかぎり」、高知発達障害研究PJによって高知大学附属特支内に設立された「hocco sweets」が出店し、ブールドネージュやフルーツチップス、クッキー、またレザークラフト製品などが販売されました。また全附連グッズとして、ピンバッジやこれまで発刊された「この国の未来のために」をはじめとする書籍も販売され、どちらのブースも多くの参加の皆さんであふれていました。

大会宣言

「平成」という時代がまさに終わりを告げようとしている現在、わが国には、国際化、高度情報化に加え、急速に少子高齢化、人口減少の波が押し寄せている。昨年８月に文部科学省で取りまとめられた「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」の報告書では、少子化のため教員需要の減少期が到来する一方、教員の専門性の高度化が求められ、また、公立私立とは異なる国立大学附属学校としての存在意義・役割・特色の明確化も求められている。こうした現状を踏まえ、「子どもたちとこの国の未来のために ～今、求められる附属の「改革」と「周知」～」を開催スローガンに掲げ、全附P連PTA研修会第９回全国大会を開催した。

有識者会議報告書から１年以上が経過し、より公益性・公共性を高める「改革」や、広く世の中に理解いただくための「周知」について検討するとともに、より国や地域に必要とされる附属学校となるための方策や今後の可能性について、参加者全員で意識を共有した。また、社会問題化している現代の教育課題や、スポーツ、脳科学といった視点からの子育てについても全参加者の共通テーマとして学び、保護者としてPTAとして、その果たすべき役割について考察した。

当連合会では、子どもたちとこの国の未来のために、日本の公教育の向上に寄与する附属学校を支えることを目的に、今後も大学、附属学校とともに、附属学校におけるPTA活動の振興を図り、附属学校の持つ社会的使命、存在意義などを国や地域に広く発信することにより、広く世の中の理解と支援が得られるよう、積極的な活動を展開することをここに宣言する。

平成30年９月29日

大会の最後に上記「大会宣言」が参加者皆さまの賛同のもと採択され、その後「閉会宣言」にて２日間の大会が閉会しました。

三浦実行委員長による大会宣言

宮永副実行委員長による閉会宣言

全附Ｐ連 絵画コンクール2018

今年も絵画コンクールが「未来の私、未来のこのまち」をテーマに開催されました。茨城大学教育学部４校園が主管となり、附属中学校を本部として９月24日に行われた審査会では、全国102校園2181作品の中から入賞作品120点が選出されました。

水戸で育む〈さきがけ〉の精神

主管校紹介

茨城大学教育学部附属四校園

茨城大学教育学部附属四校園のルーツは明治10年の茨城県師範学校の附属小学校にさかのぼります。昭和26年に茨城大学教育学部附属小中学校となり、昭和33年、現在の小中学校の形になりました。幼稚園は昭和42年に、特別支援学校は昭和52年に創立され、小学部、中学部、高等部があります。

附属学校は、教育実習や授業研究等、教員養成の使命を担い、県内外の教育機関に対して研究成果を還元し、地域の教育力向上に寄与しています。また、幼小中の一貫教育によって教育効果を高める工夫がなされています。さらに、幼小中と特別支援学校の間でも様々な連携を通じて、現代の子どもたちに関わる様々な課題の解決に当たっています。幼小中通じて、心身ともに健康でたくましい、教養と社会性を備えた人間を育てるために、様々な教育を提供しています。現職知事や教育長をはじめ議員、文化人、専門職を輩出しており、こうした卒業生の活躍がその教育の成功を裏付けています。特別支援学校は、心身の健康や基本的社会性を身につけるための成果を上げています。

過去、茨城大学附属四校園のＰＴＡは、全附連、関附連でも大いに活躍しており、全附連の歴代会長には平成13～14年の佐藤衛氏がおります。現在は専務理事として大竹昌士氏が会の発展のために尽力しております。

主管校所感　附属４校園の思いをひとつに

茨城大学教育学部附属中学校 PTA会長
絵画コンクール2018主管 統括本部長
磯﨑 寛也 氏

百年に一度の絵画コンクール！昂揚感から全てが始まりました。「未来の私、未来のこのまち」は運営理念となり、このまちでしかできない審査会をめざす情熱を共有しました。中学校を本部として事務局・作品・審査の３チームに組織化、６月から隔週で全体会を行い、緻密な工程管理を行いました。結果、天災を乗り越え、１０２校園２１８１枚が水戸に集まりました。審査の特徴は現代美術の専門性です。運営ポイントは①早期の組織化②ＳＮＳの利用③設計ＩＴ等専門能力の最大活用です。４ＰＴＡと大学の連携が母校への何よりのプレゼントとなりました。

審査員講評

茨城大学教育学部
教授
小泉 晋弥 氏

「絵画とは何か」を学ぶ

考えてみれば、子どもたちとは「未来そのもの」です。その彼らがどのような未来像を描いてくれるのか、期待して審査に臨みましたが、期待以上の作品が寄せられ、賞に採り上げられない多くの作品を惜しい気持ちで残しました。

幼稚園児たちは、数時間後の気持ちですら未来として表してくれたと感じます。小学生たちの未来図の中に、樹木を中心とする世界観を感じさせるものが多く、エコロジカルな感性が素直に育っていることを心強く思います。中学生の作品に彼らが７年前に体験した震災に関連した表現があり、社会意識の鋭さと積極的に関わろうとする前向きな姿勢を見出すことができました。特別支援学校の子どもたちの作品からは、自己が関わる世界を忠実に見つめることが確固とした未来への足場となる芸術表現の原点を見せられた思いです。改めて絵画とは何かを学ぶ機会となりました。

デザイン・クリエイティブセンター
神戸センター長
芹沢 高志 氏

子どもたちの心に響く表現

私は地域で開催される国際芸術祭のディレクターを務めることが多いが、こういう芸術祭では空間を期間限定で丸ごと作品化してしまう手法がほとんどなので、単体の絵画と向き合うことはほとんどない。ましてや子供たちの絵画コンクールの審査など、初めての経験だった。子供たちの絵画コンクールといえば、ああ、ああいう「子供らしい」絵画を選べばいいんだなと、軽い気持ちで引き受けたのだが、審査会場に集められた多様な表現を前にして、戸惑ってしまった。そうか、今まで思っていた「子供らしい」絵画とは、実は選ぶ側の固定した見方だったんだと、あらためて思い知る。子供らしからぬ叫びの表現や時代の不吉な空気を感じとった作品もある。私は頭で考えることをやめ、ひたすら心に響いてくる表現だけを選んでいった。新鮮な経験だった。

水戸芸術館現代美術センター
主任学芸員
竹久 侑 氏

持って生まれた想像力を豊かに

幼稚園から中学校、特別支援まで、想像力あふれる子どもたちの絵画を一斉に見ることは、心躍る経験でした。独創的な色使いが際立つ勇壮な桜島、大銀杏の落葉にたわむれる小学生など、子どもたちのエネルギーが画面からあふれ出るような作品に目を見張りました。一方、将来一人暮らしを始める折の家族との別れを思い悲哀にくれる自画像や、社会を包み込む茫漠とした不安を描写したものもあり、「未来の町、未来の私」というテーマで描かれた作品群には、子どもたちそれぞれの視点、心境を見受けることができました。また、幼稚園児の絵にほとばしる、既成概念に縛られることのない自由なイメージが、年齢を追うごとに委縮していく傾向も見られ、子どもたちが持って生まれた想像力を豊かにする環境づくりの大切さを、改めて実感しました。

全附P連 絵画コンクール2018 未来の私、未来のこのまち 入賞作品

※学校名については略称とさせていただいております。

さきがけ賞

山形小　6年

茨城幼　年長（きりん組）

茨城幼　年長（きりん組）

茨城小　1年

茨城中　1年

千葉幼　年長

千葉小　1年

お茶の水小　5年

上越教育小　6年

金沢幼　年長

愛知教育幼　年少

愛知教育幼　年中

大阪教育平野小　1年

大阪教育平野小　2年

神戸幼　年中

神戸幼　年少

神戸小　2年

岡山中　2年

岡山中　2年

広島三原小　2年

山口光中　1年

鳴門小　1年

鳴門小　5年

香川高松小　1年

香川高松小　4年

福岡教育福岡小　2年

福岡教育福岡小　5年

宇都宮小
3年

お茶の水小
4年

京都教育桃山小
2年

大阪教育平野小
3年

大阪教育池田小
1年

広島三原幼
年中

長崎幼　年少

長崎幼　年中

長崎小　1年

長崎特支　中学部　1年

熊本幼　年長

鳴門小
1年

鳴門小
3年

愛媛中
3年

福岡教育福岡小
2年

福岡教育小倉小
3年

熊本小
3年

熊本幼　年長

熊本小　3年

熊本小　3年

熊本小　3年

熊本小　3年

宮崎小　2年

鹿児島幼　年少

鹿児島幼　年中

鹿児島小　4年

会長賞

東京学芸特支
小学部５年
（タイトルなし）

宮城幼　年長
一人暮らしと
大好きな街

金沢小　６年
画家の私

茨城中　１年
日に当たる日陰者

鹿児島小　４年
未来のさくら島

熊本小　１年
まいにちたのしいことがおこる、
ぼくとみんなのみらいのまち

カンガルー賞

茨城中　2年

茨城幼　年少（りす組）

千葉小　3年

埼玉幼　年長

宇都宮小　5年

上越教育小　2年

東京学芸大泉小　3年

千葉小　3年

静岡浜松小　3年

金沢幼　年中

富山幼　年中

茨城特支
高等部３年

愛知教育名古屋小　6年

愛知教育名古屋小　1年

愛知教育幼　年長

横浜国立鎌倉小
1年

大阪教育池田小　1年

大阪教育平野小　2年

京都教育京都小中　3年

香川坂出小　2年

山口光中　3年

岡山中　2年

山梨小
1年

福岡教育幼　年少

愛媛小　3年

愛媛幼　年長

長崎小
1年

長崎幼　年長

福岡教育福岡小　5年

福岡教育幼　年中

熊本小
4年

鹿児島幼　年中

宮崎小　4年

熊本小　2年

長崎小　2年

特別賞

筑波大塚特支　幼稚部　年少
ハワイ

宇都宮小　５年
カジキとマグロのリレー

広島三原幼　年少
あめと水たまりとかがやくわたし

名古屋中　３年
未来へ残したい日常

鹿児島小　１年
ちゅうおうこうえんのなつのふんすい

茨城小
４年
いばらき大学ふぞく
小学校の大いちょうと
はらからの笑顔

学校園優秀賞

- 長崎大学教育学部附属幼稚園
- 福岡教育大学福岡小学校
- 熊本大学教育学部附属小学校
- 茨城大学教育学部附属小学校
- 茨城大学教育学部附属中学校
- 東京学芸大学附属特別支援学校

インタビュー

特別審査員
日比野 克彦 氏

プロフィール
1958年　岐阜県生まれ。
岐阜大学教育学部附属中学校卒業。
1984年　東京藝術大学美術研究科大学院修了。
1996年　ベネチアビエンナーレ参加。
2015年　芸術選奨芸術振興部門文部科学大臣賞受賞。
2020年　東京オリンピック文化プログラムTURNを監修。
現在、東京藝術大学美術学部長、先端芸術表現科教授。
岐阜県美術館館長。

Q．審査を終えての感想をお聞かせください。

子どもたちの未来に対する自分の夢やこだわりなどの思いと、それを絵として伝えようとする思いの強さを感じました。またその中には、訪れる未来への期待と不安、希望もそれぞれの個性的なイメージで描かれていましたね。審査も楽しかったです。

Q．今年のテーマ「未来のわたし、みらいのこの町」はいかがでしたか。

例えば、同じ「未来」という言葉に対して、科学技術が目まぐるしく発達する中、AIなどの人工知能やロボットとの共存を描いた作品があった一方で、これからの自分の成長を、昆虫が幼虫から成虫になる様と重ねた作品などもあり、子どもたちが自由に自分のイメージを描けた素敵なテーマでした。

Q．全国の附属学校園へのメッセージを聞かせください。

物事をイメージ（想像）する力はとても大切なことです。その力は図工や美術の時間に養われるのではなく、日常生活のあらゆる場面で養われるものです。例えば国語の授業では文章を読んで、その情景を想像する、また算数では図形を立体化する力、形の面白さに気づくこと、そのすべてがイメージ力を養う〝美術の授業〟です。附属に通う子供たちが、自分の生活すべてがアート（美術）であることを感じるような機会を作って頂ければうれしいですね。

（インタビュアー　北島一人）

常に「美」を感じる瞬間・機会・力を

日比野克彦賞

広島幼
年中

愛知教育幼
年中

埼玉幼
年長

群馬幼　年中

茨城中　1年

岩手幼　年長

千葉小　1年

埼玉幼　年少

群馬特支　2年

京都教育桃山小　1年

金沢小　1年

金沢幼　年長

愛媛幼　年少

岡山中　3年

京都教育桃山小　3年

宮崎小　1年

長崎幼　年長

愛媛小　5年

鳴門教育小
2年

福岡教育福岡小　5年

附属

OB訪問

第10回

中田 敦彦 氏 × 呉本会長 対談

東京学芸大学附属高等学校のOBで芸能界を中心に活躍される中田敦彦さんを訪問させていただきました。とても自由な校風の中で自分の個性を磨いてきた中田さん。存在をアピールすることの重要性や柔軟な発想は示唆に富み、今後の国立大学附属学校の進むべき方向にも参考になると感じました。有楽町のニッポン放送でお話を伺ってきました。

次世代エリート教育のイメージを切り開く

呉本：現在、国立大学附属学校は少子化や国の財政難による見直しもあり「地域のモデル校になっているのか」とか、「一部のエリートのための学校ではないのか」、「エリート教育なら私学でいいのではないか、国費で運営されるべきなのか」など、特に風当たりの厳しい環境にありますが、ご自身が中学・高校と多感な時期にすごされてみて、附属学校に持っているイメージ、感想などをお聞かせいただけますか。

中田：高校は、私立も、公立も、国立大附属もある中で一番レベルの高い人が国立大附属に進学するという流れのようなものがありました。

レベルの高い生徒が難しい試験で選別されたにもかかわらず、入学してみると、ほとんど受験向けの教育をしない（笑）。

そうとう個性が強い学校だということが徐々にわかってきました。

当時、教育の研究機関との認識は全く無く、スパルタな環境とは対極にあったように思います。「ガンガン勉強していいところに進学しよう」よりも自発的に勉強する生徒と自由に教える教師。

先生には「勝手にいい大学行ってください」みたいなことを言われましたし、それがみんなの共通認識でした。

中学の印象もとても自由（笑）。校則が厳しいわけでもなく、宿題がたくさんあるわけでもなく逆に生徒の自主性が高いことを前提に成り立っている印象でした。

荒れた学校ほど生徒をコントロールしなくてはならないから厳しいですよね。自分たちで目標を立てられる生徒だと、こんな教育環境ができるのだと今になって思います。

思春期の人間の自尊心を尊重して、信頼と期待が大きな栄養素になっていたんです。

そんな国立大附属の気風が好きです。

また、エリート教育に批判もあるようですが、必要なことだと思います。

どんどん進めてしまうと、遅れてしまう生徒もいるから、じっくりやることも必要ですが、優秀な子にとってみると非常に苦痛ですよね。

もっともっと速いスピードでレベルの高いことをやりたい、そんな仲間に囲まれている環境下で知的好奇心を満たしてくれる授業が必要だと思います。

優秀な子の才能をのびのびと開花させる、世界に羽ばたかせる、エリート教育にお金をかけることが日本を元気にしていくと思います。

呉本：附属学校の考えるエリート教育と、世間一般で言われるエリートという言葉にギャップを感じることがあります。

全国の附属学校の先生方と話していると、校園種を問わず、どの先生もそれぞれのコミュニティーでのリーダーの育成は意識しています。それがエリート教育であるのならば、それは主体性と自己責任、他者を思いやる気持ち、インクルーシブな思考、郷土への愛といったような要素をバランスよく兼備えた人を育てる総合的人間教育であり、状況に応じてリーダーにもなれるしフォロワーにもなれるという真のエリートを育てる教育だと思っています。

中田さんのお考えはいかがですか。

中田：母校では伝統的に全クラス演劇をやる学園祭の企画に力を入れていました。それも学校側でコントロールせず、クラス内で企画、演出、脚本をします。

なぜこの受験の大事な時期に凄い時間を費やして熱心にやるのかと（笑）。自分自身も芸能界に入ってかなり特殊な卒業生だと思いますが、同級生も様々なジャンルで大活躍をしていて、そのネットワークに助けられています。

それは勉強の競争からではなく、演劇しかり、仲間とのコミュニケーションが土壌にある気がします。

高校の価値を卒業してから知りました。

皆さん思っているネガティブなイメージを圧倒的に払拭するような、光輝く新しい時代のエリート教育が如何に素晴らしいか、イメージを切り開いていくことに意味があると思います。

呉本：世間の批判をかわすために「エリート教育はしておりません」とか、変に逃げるようなことをすると附属学校のもつ素晴らしいところが、どんどん損なわれていってしまうような気がしています。我々の育てるエリートはこうですよ、次世代の社会に必要な人の姿ではないですか、と自信をもって打ち出していきたいですね。そして、それがこの国の公教育全体にフィードバックされていくことが重要です。

それを実際に証明してくださっているのが中田さんはじめ附属学校を卒業して各方面で活躍している皆さんですよね。勇気をもらえます。そのような中田さんから全国の附属学校の在校生たちへメッセージをお願いします。

中田：自由な教育の中にあるので、個性に磨きをかけてもらいたいと思います。自分の時間の使い方をして、好き放題やってもらいたい。

教育はあくまでヒントで、雑談的な話の中に閃きがあったり、様々な本を読んで人生に影響があったり、そういうきっかけ出しですよね。

子どもたちは「親が言ったことより、親がやっていること」を見る

呉本：先生、保護者へもお願いします。

中田：気楽にやってくださいですね（笑）。親になって思うのは、すぐ追い詰められてしまう。こうしなければ優秀にならないのでは？こういう教育をしてはいけないのではないか？強迫観念にとらわれてしまうんですよね。

でも子どもたちは親が言ったことよりも、親がやったことを見ているし、先生が言ったことよりも、先生がどう生きているかを見ているんだと思うんです。

先生自身、親御さん自身が生き生きすることが大事。不完全でもパワフルに自分の課題に立ち向かっていく姿を見せてほしいですね。

呉本：最後に、少子化や国の財政難による見直し、附属学校のもつ社会的使命の世間への周知不足などから、附属学校はいらないのではないかなどの意見も少なからずいただく風当たりの厳しい現状ですが、中田さんのご意見をお願いします。

中田：どの存在も競争と淘汰の中にあります。お笑いの世界でも凄く面白いにもかかわらず、なかなか世に出られない人がたくさんいます。

面白いだけではたりないのですよね。武勇伝、パーフェクトヒューマンなどでも、若い人に言わせればバズらせるということ、みんなに知ってもらうことを重視してきました。

教育の中身をもう一度見直すことよりも、例えば全附連の冊子をおしゃれなクリエーターにお願いするとか、ロゴをおしゃれにするとか、ちょっとしたパーティーやフェスをしたりみたいな広告戦略を変えることも大事だと思います。

日本の将来の礎になる教育をしているのに評価されない、批判がある。面白いのにテレビに出られない人、売れない人と共通するかもしれません。

附属学校ってかっこいいね、おしゃれだねってなることの方が大事かもしれない。自分だったらまず校章と制服と冊子のデザインを変えます（笑）。

大学受験に向けた勉強ももちろん大切ですが、あくまでヒントをくれるだけの、可能性と余白のある教育、その信頼関係を享受している幸せを感じながら学校生活を満喫して、自分が何をしたいのか突き詰めていってもらいたいですね。

オリエンタルラジオ

中田 敦彦 氏

（東京学芸大学附属高等学校卒）

プロフィール

なかた　あつひこ
お笑いタレント、実業家、お笑いコンビ「オリエンタルラジオ」のボケ、ネタ作り担当。
1982年９月27日佐賀県生まれ。保護者の転勤に伴い、高槻市、山口市を経て東京に。
山口大学教育学部附属山口中学校に入学、東京学芸大学附属小金井中学校、東京学芸大学附属高等学校、慶応義塾大学経済学部を卒業。
大学時代のアルバイト先で藤森慎吾氏と出会い2003年８月１日「オリエンタルラジオ」結成。
2004年、M-1グランプリで吉本総合芸能学院在籍中ながら準決勝に進出し、一躍注目を浴びる。
持ち前の知識、教養、独自の視点から、お笑いの世界はもとより、クイズ番組やコメンテーターとしても活躍中。

取材メンバー 一同と
左より　広報副委員長 宮崎秀夫　広報委員長 北島一人
中田敦彦 氏　会長 呉本啓郎
広報担当副会長 神余智夫

寄稿　国立大学附属学校との連携による教育の推進

新潟県長岡市教育委員会
教育長　**高橋　譲 氏**

長岡市は、新潟県のほぼ中央に位置する人口約二十七万人の県内第二の規模を誇る都市です。百五十年前、戊辰戦争に敗れ焦土と化した長岡のまちに、三根山藩から送られてきた百俵の米。大参事の小林虎三郎は、それを家中に分配せずに国漢学校設立の資金にあてた、という故事『米百俵』。長岡には、「人づくりはまちづくり」「教育は未来への希望である」という米百俵の精神が脈々と受け継がれ、これまで近代日本の発展を担った人材を数多く輩出してきました。現在、長岡市では、豊かな体験と確かな学びで、子どもたちに夢を描き、志を立てる力と生き抜く自信を育む『熱中！感動！夢づくり教育』を展開しております。

この『熱中！感動！夢づくり教育』における様々な事業を推進するにあたり、附属学校園、特に新潟大学教育学部附属長岡学校園との連携は、重要な要素となっています。例えば、長岡市教育センターの研修講座では、附属学校園の教員の方々から、研究開発学校の知見を生かして、指導者や実践提案者として御協力をいただいています。また、附属学校園の研究会には、市内の多くの教員が参加して、授業づくりのヒントを得たり、教育界の動向を知る貴重な機会となったりしております。他にも、附属長岡小・中学校の校長先生方には、毎年、長岡市立学校の教員が応募する教育論文の審査委員長をお願いし、教員の実践意欲を高めるための適切なアドバイスをいただいております。さらに、附属学校園に勤務経験のある教員は、公立校園に異動後、組織の中核を担う教員として学校運営を担ったり、各教科・領域の研究を推進したりするなど、活躍の場を広げています。これらの連携により、『熱中！感動！夢づくり教育』の柱の一つである「どの子にも分かる授業の実践」は、各学校に着実に浸透してきています。一方で、「熱中・感動体験の充実」という柱に位置付けられている様々な事業（中学生ホノルル・フォートワース訪問事業、「東京フィルハーモニー」夢づくりコンサート、小・中学生ロボコン教室等）には、附属長岡小・中学校の児童・生徒からも参加していただいており、感動体験や物事に熱中して取り組むことの尊さについて市立学校の児童・生徒と共有する機会を多くもっています。

今後も、様々な面での交流を図りながら、全国に誇れる教育を一層推進するために、長岡市と附属学校園が協働してまいりたいと考えております。

最も多い同窓生の職域である医師の会を結成！学校関係者とも連携！

筑波大学附属駒場若葉会医師の会　代表世話人
（医療法人 奏健 やまもとクリニック 院長）
山本 晴章 氏
（筑波大学附属駒場高等学校卒）

我が校の卒業生のうち医師及び医学部学生は現在約850名で、在学生も医学部希望者が多いとのことで、卒業生の職域としては最も多い職業となっております。大学ないし大学院卒業後は、臨床系のみならず基礎系の研究者など多岐にわたる医学・医療分野において活動している卒業生が輩出されており、卒業生間の縦断的かつ横断的な情報提供や意見交換などの人的交流を通しておこなうために、2005年に筑波大学附属駒場若葉会医師の会（通称：筑駒医師の会）が結成されました。会員の社会的活動を支援すると共に、母校への貢献として学生に「医師とはどんな職業か」等の講演や、会員による学生や父兄、学び舎周辺の地域住民への健康教育などを母校からの依頼を受けておこなっています。

本会は有志の集まりであり、該当される職域の卒業生が全員参加されているわけではありませんが、会員の情報交換の場として希望者にはメーリングリストがあり、学校側や他職種の卒業生からの医療に係わる相談や、その他情報提供をおこなえるようになっていますが、今のところ利用者は少ないようです。また、毎年年末までに勤務先や専門領域などを記載した名簿を賛同者に配布しています。

定例会としては、毎年開催される世話人会の場において卒業生の中から演者候補を決め、講演の承諾を得られた医師1－2名と医師以外の卒業生による講演会が毎年年末に開催されています。2018年は12月29日に北海道大学眼科学教授の石田晋氏による「受容体結合プロレニン系と糖尿病網膜症」と東京大学大学院・教養学部長の石田淳氏による「不安の時代の安全保障」の2講演が予定されています。この講演会の後は場を変えて懇親会をおこない、中学生・高校生時代の同級生、先輩と後輩が一同となって情報交換や交流を深めています。開催案内は毎年同窓会報に掲載して、在校生・卒業生、その家族や友人などに参加していただけるようにしています。毎年、同窓会（若葉会）からは会長をはじめ役員の方々に、また学校側からも校長先生や教官を招待させて頂きご参加いただいております。さらに昨年からは、父兄会（駒場会）の会長にも招待の案内をさせていただいております。今後は同窓会の総意を得て、他の各職域の会を広め、母校貢献並びに縦横の連携と情報交換ができるよう期待しています。

附属OB訪問 プラス　国立大学附属学校卒業生の皆様からご寄稿いただきました。

内閣府 政策統括官
（共生社会政策担当）付 参事官
（子どもの貧困対策担当）付 参事官補佐
平田 菜摘 氏
（東京学芸大学附属小金井小学校卒）

附属学校への感謝を胸に

時が経ってからその有難味が身に染みて分かるということは、皆様もご経験がおありかと思います。私にとっては附属小学校での生活もまさにそうです。昼休みは広い校庭―土とゴムの2種類のグラウンド―を駆け回っていました。校内ではたくさんの動物を飼育しており、自宅でペットが飼えなかった私にとってはかけがえのないふれあいを持てる場所でした。荘生活では黒曜石を採取したり、植物観察でスケッチをしたり、思う存分大自然を感じることができました。

なかでも遠泳は大変思い出深い行事です。泳ぎが得意でなかった私にとって、遠泳はまさに人生で初めての試練でした。足のつかない海に泳ぎ出さなければいけないという状況は、感じたことのない恐怖に包まれる経験でしたが、私的にも平泳ぎの練習を重ね、最後には一五〇〇mを泳ぎ切りました。その達成感は浜辺にあがってから不思議とじわじわと湧いてきたことを覚えています。それだけ必死だったのかもしれません。

理科の授業では様々な実験に取り組み、算国社の授業は先生の板書が綺麗だったのも印象的です。部活は小学生では珍しい硬式テニス部に所属し、卒業後に珍しがられるのが自慢でした。習字の時間は周りの達筆さに気後れしましたが、音楽のレベルも高く、アコーディオンという大きな楽器を小学生の小さな体で一生懸命弾きました。

今思い返してもなんて贅沢な思い出の詰まった場所でしょうか。電車通学のため早起きするのは大変でしたが、同級生と電車に乗っている時間は楽しく、ついおしゃべりが過ぎてお叱りをいただくこともしばしば。そんな思い出の一つひとつ、関わってくださった先生方と友人との日常が、わたしのその後の人生までも豊かにしてくれています。

附属小学校卒業後、紆余曲折を経て、私は現在内閣府で子供の貧困対策に取り組んでいます。附属の学校にも生活支援を必要な家庭の子供が6％ほどいるとの調査結果があります。全国の子供の貧困率が13・9％であることに比すれば低い数字ですが、それでも驚きを禁じ得ない数字ではないでしょうか。

政府のみならず、NPOや多くの企業等が主体となって、子供たちが家庭の経済事情にかかわらず、夢に向かって頑張ることができる社会の実現に向け、様々な取組を推進しています。子供たちへの支援の輪が広がる中、私たちにできることは何か、日々模索しています。貧困状態に置かれた子供たちはあらゆる体験の機会やチャンスに恵まれていない可能性があります。

自分の恵まれた環境と経験を日本社会に還元したい。自然とそのような想いを起こさせてくれる、附属の環境に心から感謝しています。

附属トピックス

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校

伝統、地域とつながる～附特（ふとくかんとう）竿燈の取組～

本校がある秋田市では毎年8月上旬に、全国的にも知名度の高い「秋田竿燈まつり」が行われている。竿燈という地域の伝統行事に子どもたちを親しませたいという目的のもと、本校では昭和49年から教育活動の中に竿燈を取り入れてきた。さらに、当時の職員の「大きな感動と成就感、社会参加の意欲と自信をもたせたい」という願いから、昭和60年には秋田大学竿燈会の一員として「秋田竿燈まつり」に参加するようになった。以来、34年連続で参加している。

本校ではこの竿燈への取組を「附特竿燈」と呼んでいるが、これに取り組むのは中学部と高等部の生徒である。竿燈の学習は例年6月中旬から始まり、特別活動の時間や昼休みに練習を行い、演技（中若（ちゅうわか）、小若（こわか））と囃子（太鼓演奏）の技術向上を図っている。7月中旬に附属幼稚園と、また下旬には近隣の児童養護施設と交流を行っており、生徒全員で練習の成果を披露し、園児や園生と触れ合う機会になっている。

そして8月に入るといよいよ「秋田竿燈まつり」である。伝統芸能の披露であることと体力面等を考慮し、本番の祭は選抜生徒の参加としているが、毎年たくさんの観光客や市民から多くの励ましの言葉や「どっこいしょ、どっこいしょ」の掛け声をいただいている。終了後の生徒たちからは「最高に楽しめた」「お客さんからたくさんの声援をもらえてうれしかった」と様々な達成感を得た姿を見ることができる。

附特竿燈は地域の伝統行事に親しみながら、生徒の社会参加を実現し、生徒たちが自身の成長を感じることができる教育活動である。こうして活動できるのは秋田大学及び秋田大学竿燈会、また秋田市竿燈会を始めとする地域の方々の御理解と多くの御協力をいただいているからであり、改めて感謝するとともに、今後も本校の特色ある教育活動として続けていけたらと願っている。

教諭　会場 一幸

演技　小若　中若
（小若の方が提灯の数が少ない）
左側の「秋田大学」の竿が大若（提灯の大きさが小若、中若のそれより大きい）

囃子　中央の生徒と右側の生徒が演奏を交替しようとしている場面
右側の締太鼓を演奏する生徒もいる
左側の笛演奏は職員が担当している

愛知教育大学附属高等学校

ダンス部　夢の全国大会出場！

本校のダンス部は平成十二年に創部し、十五年から今の顧問である沖永先生のもとで、文武両道を目指して、日々練習に励んでいます。そんなダンス部には毎年目標にしている大会が2つあります。一つは創作ダンスの全日本高校・大学ダンスフェスティバル。そしてもう一つは日本高校ダンス部選手権、別名「DANCE STADIUM」です。今年度ついに夢が叶い、そのDANCE STADIUMに出場することができました。顧問からは「ダンスの大会では、衣裳の出来も結果に影響するため、保護者の方からの理解と協力が大きな力となった」と聞きました。

また、本校ではダンス部の他にも、限られた活動時間で効率よく練習に励む部活動があります。最近では陸上部がインターハイに、合唱部が中部大会に、吹奏楽部やサッカー部が県大会にそれぞれ出場しました。

昨今、部活動については、生徒の健康管理や教員の働き方改革の面で、様々な課題が指摘されています。しかし、部活動で培われる教育的効果も否定できないのは事実です。一方的に無くせば良いと言うものではなく、バランスよく伸ばしていくことが重要です。

本校の教育目標に、「あたたかい人間になろう」があります。引退の日に、三年生部員のある保護者から、次のような話しを聞きました。「先生、うちの子が改まって私たち両親に、『ありがとうございました』と言ってくれました。感動で涙が流れました。附属高校の教育目標あたたかい人間になろう、そのものだと思い感謝の思いがこみ上げてきました」。

この先、日本社会の将来を考えた時、AIやロボットが大きな変化をもたらすと言われています。しかし、そうした世の中にあって「あたたかい人間」の存在は益々大切なものになってくると思います。本校は研究活動に加え、文武両道で知徳体をバランスよく伸ばす教育の実践を行っていきます。

副校長　北河 洋一

会場にて記念撮影

大会の様子

福岡教育大学附属福岡小学校

幸運がもたらした子供たちの可能性

平成30年9月10日、まだまだ暑い日が続く中、東京2020オリンピックマスコットの「ミライトワ」、東京2020パラリンピックマスコットの「ソメイティ」、アテネオリンピック体操の金メダリスト中野大輔氏、マスコットの生みの親である谷口亮氏が附属福岡小学校に来校されました。これは、東京オリンピック・パラリンピックに向けたプロジェクトの一つで、本校が幸運にも10100校目の応募となったことで実現したものです。

当日は、多くの報道関係の方々や保護者も来校し、子供たちも期待に胸をふくらませていました。そして、待ちに待ったマスコットの登場で、会場は一気に盛り上がりました。イベントでは、オリンピックについての三択クイズに答えたり、マスコットと一緒に記念写真を撮影したりしました。お二人にお話を伺うコーナーでは、中野氏が福岡教育大学大学院のご出身であり、大先輩であること、谷口氏が附属福岡小にほど近いところにお住まいであることをお聞きし、お二人がより身近に感じられました。お二人をお招きした楽しい給食交流の後は、中野氏が素晴らしい体操実技の数々を児童に披露してくださいました。世界で活躍された中野氏の素晴らしい実技から、基礎的な運動のコツを学ぶことができました。

このような一流のアスリートや可愛いマスコットとの交流を通して、子供たちは、テレビの向こうの遠いイベントだと感じていた東京2020大会をとても身近に感じることができたと思います。また、オリンピック・パラリンピックは一流のアスリートが集う特別な場です。努力し続けることで、大きく広げることができる自分の可能性を、附属福岡小学校の子供たちは実感したことでしょう。

この度、この特別な機会が、未来へと羽ばたく子供たちの希望となったとしたら、それは大変素晴らしく、幸運なことであると感じております。

PTA会長　藤原 伸行

このコーナーでは、学校およびPTA活動における「先進的な取り組み」や「特色ある活動」などの情報を募集しています。
ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひ、全附連事務局（Eメール：jimukyoku@zenfuren.org）までご連絡ください。

寄稿

これからの運動部活動の在り方

～学校と地域を結ぶプラットフォームとしての運動部活動～

大阪教育大学附属高等学校平野校舎　教諭　**松田 雅彦 氏**

1　はじめに

現状の運動部活動は、少子化によりチームが成り立たない、教師の多忙化で顧問のなり手がないなど多くの問題を抱えており、その対応として外部指導者制度の導入や地域スポーツクラブへの移管などが検討されている。しかしながら、これらは表面的な問題への対処にとどまっており、本質的な課題解決にはなっていない。ここでは、運動部活動に係る課題を整理するとともに、これからの運動部活動の在り方について示してみたい。

2　運動部活動における本質的課題

運動部活動の課題は、次の3つに集約される。これらの課題を解決することが、結果的に少子化や教師の働き方改革という問題の解決につながると考える。

①学校全体のスポーツカリキュラムの不在により、運動部活動(クラブサービス)と他のスポーツサービスとの関連がとれていない。

②チーム＝クラブとして理解されており、クラブとしての協働性（クラブワーク）やマネジメントの学習が希薄である。

③その結果、学校のスポーツシステムが生涯スポーツのモデル学習、および地域と学校をつなぐプラットフォームとして機能しなくなっている。

(1)スポーツサービスの関係性と学校におけるスポーツカリキュラム

学校のスポーツサービスには、「プログラムサービスとしての体育授業」「イベントサービスとしての体育祭・スポーツ大会」「クラブサービスとしての運動部活動」「エリアサービスとしての休み時間の体育施設開放」等がある。学校におけるスポーツカリキュラムは、これらの関連を考えて編成することが必要である。例えば、「プログラムサービスとしての体育授業」で柔道を体験し、もっとやってみたいと思った生徒が「クラブサービスとしての運動部活動」で楽しむ、「プログラムサービスとしての体育授業」でアルティメットをプレイしたところ、とても面白かったからみんなで楽しみたいとして「イベントサービスとしてのスポーツ大会」を生徒会が企画するなどである（図1）。これからの学校においては、これらを有機的に関連付けたスポーツのカリキュラムを編成し、クラブサービスの学習場面として運動部活動を位置づける必要がある。

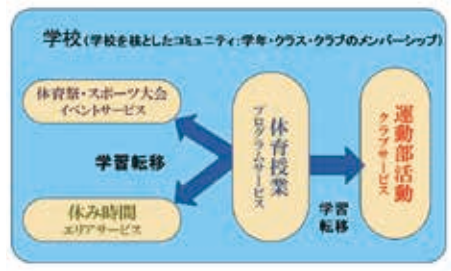

図1．学校におけるスポーツサービスの関連性

(2)チームワークとクラブワーク

本来、クラブの枠組みは学校でいう「生徒会の枠組み＝クラブ」であるが、ほとんどの学校ではチーム単位をクラブとして認識している。そこに部活動のもう一つの課題がある。

チームには、勝利を目的として協働するネットワークがある。クラブには、種目やチームを超えて人や組織が共にスポーツを楽しむことを目的とした共生的・協働的ネットワークであるクラブワークが存在する。クラブワークが機能する組織では、クラブに所属している他の種目やチームとの共生・協働が可能であり、互酬的関係性（お互い様）を保つことができる。例えば、学校の体育館やグラウンドを複数の種目やチームで共同利用することや、体育祭やスポーツ大会において部活動の生徒たちが運営のお手伝いをしていることがあげられる。しかしながら、現状の学校で共同利用ができているのは、学校というコミュニティが存在することと生徒会組織（クラブ）が行なうべき施設調整役等を教員が担っているからであり、クラブ組織として生徒会が機能し、クラブワークの学習がしっかりとなされている学校は少ない。このことは、地域において活動施設に空きスペースがあったとしても1つのチームが独占して使っている現状（アウトカム）から伺うことができる。

現在、国は、地域住民の自発的な活動に支えられ、チーム（スポーツ種目）ではなくスポーツ文化の視座から多種目・多世代・多志向という特徴をもつスポーツサービスの提供団体として「総合型地域スポーツクラブ」の育成を進めてきている。しかし、国民のすべてがスポーツ文化や本来のクラブの概念をしっかりと学んでいるならば、すべての地域スポーツクラブはすでに「総合型地域スポーツクラブ」であったはずだ。図2にあるように、学校は生涯スポーツ社会を担う組織としてのクラブモデルを備えている。学校におけるスポーツカリキュラムが機能し、クラブワークに関する十分な学習があったならば、自分たちのチームや種目だけの利害を優先した活動は少なくなり、皆が共存・共遊できる社会が実現されていたであろう。

スポーツの真の力を引き出すためには、クラブワークの学習は欠かせない。

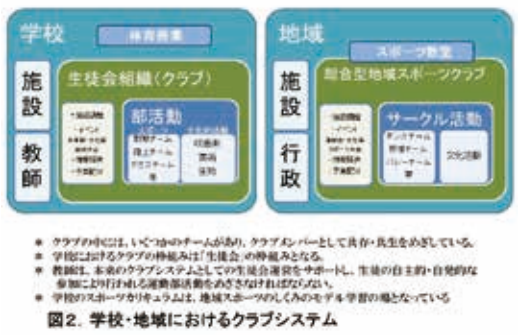

図2．学校・地域におけるクラブシステム

3　地域と学校を結ぶプラットフォームとしての運動部活動 ～運動部活動と地域スポーツクラブの結合～

現状の学校スポーツの課題は、学校を卒業すると継続して活動ができないことにある。学校を卒業した瞬間にスポーツを楽しむために必要な要素(仲間・施設・用具・指導者・プログラム・情報）をすべて失うからである。これは、外部指導者を導入しても解決できない問題であるし、運動部活動を地域スポーツクラブに移管したとしても、クラブサービスが学校からなくなってしまうという別の問題を残すことになる。

一方、地域スポーツクラブの現状も、少子高齢化の影響でチームが成り立たない、複数種目を楽しむことや活動場所の確保が難しいなど、運動部活動と同じような問題を抱えている。

これらの問題と運動部活動が抱える課題を同時に解決するためには、学校と地域を時間軸と空間軸においてつなぐ新たなシステムの構築が有効だと考える。それが、「地域と学校が協習するためのプラットフォーム（図3）」である。わかりやすくいうと「中学校を卒業しても運動部活動は卒業しないシステム」といっていいだろう。これは、中学校を卒業しても部活をそのまま続けることで、学校と地域をつなぐしくみである。中学校期は運動部活動＝地域スポーツクラブの活動であり、卒業後は、学校を拠点とした地域スポーツクラブの活動となる。このように中学校の中で地域スポーツクラブを運営できれば、高等学校を卒業しても、この地域スポーツクラブで昔の仲間と一緒にスポーツを楽しんだり、運動部活動入部者が少なくても卒業生が参加することで活動が充実したりする。さらに、そこでは、卒業生が後輩を指導するというシステムもできあがり、専門的指導ができない教師が運動部活動の顧問となった場合にも、専門的指導や審判などに関するサポートができる。そして、このシステムが継続していくと卒業生が親となり、自分の子どもたちも楽しめるように小学校・幼稚園へと地域スポーツクラブの活動を広げ、さまざまなライフステージでスポーツを楽しむことができるしくみへとつくり変えていくだろう。

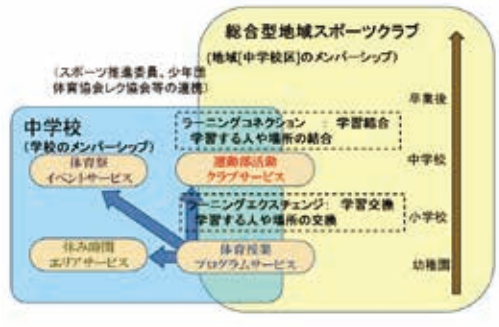

図3．地域と学校が協習するためのプラットフォーム

このしくみを導入すると、体育の授業や部活動で地域の人たちと生徒が一緒にプレイしたり（学習結合：ラーニング・コネクション）、地域クラブの指導者が体育の時間や部活動で指導したり、逆に体育の教師が地域で指導したり（学習交換：ラーニング・エクスチェンジ）、それぞれの資源を有効活用することが非常に容易くなる。チームとしての学校支援や地域コーディネーターの配置が必要とされる現状を鑑みるに、それぞれの資源を別々に考えることはもはやナンセンスであろう。

4　まとめにかえて ～2020年東京オリンピックに向けて～

地域と学校が協習するプラットフォームとして運動部活動が機能するなら、障害のある人やお年寄りと子どもたちがスポーツを楽しんだり、違う国の人と一緒にスポーツ大会を開いたり、多様性のなかで互いのスポーツ的公共性を育むことが可能となる。2020年の東京オリンピックのレガシーとして、このようなしくみを全国に普及させ、障害の有無、性別、世代、国籍などの壁を超えてスポーツでつながる社会の創造をめざしてみてはどうだろうか。

カンガルーシップ活動助成金事業について

今年も多くの附属学校園よりカンガルーシップ活動助成金事業へご応募いただき誠にありがとうございました。

本年度より少し審査基準を厳しくさせていただき、ご希望通りの助成が受けられなかった学校園もあったかと思います。申請の多くは、毎年恒例事業の活動の費用全てを助成してもらいたいといったものでした。内容は素晴らしいものばかりではございましたが、毎年恒例事業となるならば、各学校園での予算計上が可能かと考えられます。我々の考える助成とは、新たな試みを恒例行事として取り入れるために初年度予算が必要であるとか、インクルーシブ教育を新たに取り入れるための勉強会費用が必要とか、新規事業への助成が望ましいと考えております。もちろん、継続事業での予算補填も可能ではございますが、PTAで支出する不足分を補う程度でお考えいただきたいと思います。また、資産となりうる物品購入に関しましては、原則として助成の対象外とさせていただいております。また、参加者の飲食代、ボランティアへの謝金なども対象外とさせていただいておりますので、今一度ご確認をお願い致します。

ホームページに助成された事業については掲載する予定です。各学校園が、共生社会の実現の一環として、カンガルーシップ活動助成金をうまく活用していただきたく、今後の附属学校園の発展に努めさせていただきたいと考えます。今後とも宜しくお願い致します。

全国国立大学附属学校PTA連合会

カンガルー保険の改定・新プランのご紹介

来年度より、カンガルー保険が改定されます。カンガルー保険は、全国の附属学校園へ通う子ども達の安心・安全のために企画・運営しております。これまでも、子ども達の実態に即した内容となるよう、引受保険会社と日々見直しを実施してまいりました。

来年度からは、カンガルー保険全員加入制度（園児・児童・生徒総合補償制度）をご利用いただいている学校園向けに、カンガルー保険任意加入制度が更に利用しやすくなるよう、新プランを設定いたしました。これまでのプランに比べ全員加入制度と任意加入制度で重複して保証されている部分を見直し、年間保険料を抑えることにより加入し易いプランとなっています。

保険会社にもご協力していただき、全国規模での募集であることや、附属学校園でのカンガルー保険の実績を踏まえ、絶大なるご理解をいただいております。まさに、カンガルー保険は附属学校園のための保険といえます。まだ加入されていない学校園におきましては、是非ともカンガルー保険への加入をご検討いただきたいと思います。

カンガルー保険取扱代理店である、株式会社第一成和事務所（北海道、東北、関東、北信越、四国地区担当）と海上商事株式会社（東海、近畿、中国、九州地区担当）の担当者が、新プラン設定に関する詳細説明に随時伺わせていただいております。ご不明な点については、各担当取扱代理店または全附連事務局までお問い合わせください。

昨年の「国立大学附属学校のすべて」発刊に続く第２巻!

国立大学 附属学校の先進教育

好評発売中!

月刊「コロンブス」編集部による、教育シリーズ第２巻。

この国の公教育を支える国立大学附属学校の注目の研究・先進事例について、５校の注目すべき取組みや、公募で選ばれた14校の先進研究事例を掲載。さらに全国国立大学附属学校連盟と全国国立大学附属学校PTA連合会のそれぞれのミッションや取り組みも紹介。

是非、お近くの書店、またはオンライン書店にてご注文ください。

全附P連PTA研修会

第10回全国大会 ご案内

日程：2019年10月４日㈮～５日㈯

場所：ハイアットリージェンシー東京

全附P連PTA研修会第９回全国大会は全国各地より約850名のご登録をいただき、ご来賓、講師の先生方、スタッフを含めると約1000人の皆様に参加いただきました。お陰様で無事終了することができました。参加者・ご来賓・関係者の皆様に心より感謝申し上げます。現在、今回の大会参加者の皆様から直接お聞きした意見・感想やアンケートの意見・集計結果などの貴重な情報を参考にして、第10回全国大会の企画の検討を進めております。参加者の皆様にとってより魅力的で参加しやすい大会になるよう、また多くの学びや気づきがあるプログラムを提供できるよう企画してまいりますので、来年も是非多くの保護者の皆様、先生方、そして教育後援会の皆様のご参加をお願い申し上げます。

（宮永　尚）

発　行　所

全国国立大学附属学校連盟
全国国立大学附属学校PTA連合会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門
1-2-29 虎ノ門産業ビル8F
全附連事務局
TEL:03-3591-2091
FAX:03-3591-2092
E-mail:jimukyoku@zenfuren.org
印刷:株式会社インテックス

編集委員

全附連
委員長　甲斐雄一郎　筑波小
副委員長　関田義博　東京学芸小奔小
委員長　北村博幸　北海道教育大函館小
委員　片岡洋子　千葉小
委員　千葉一雄　東京工業高
委員　牧田秀昭　福井義務教育
委員　高木勝利　静岡静岡小
委員　大井育代　鳴門教育中

全附P連
担当副会長　三浦　亨　長崎小
担当副会長　神余智夫　香川坂出幼小中
委員長　北島一人　鳴門教育中
副委員長　中村裕治　北海道教育旭中
副委員長　宮崎秀夫　信州長野中

編集後記

全附P連事業の大きな柱である「PTA研修会（全国大会）」が今年も無事に閉会を迎えた。全国大会とは文字通り、全国の附属学校園から先生方、PTA役員の皆さまに参加いただき、子どもたちの健やかな成長や充実した教育環境づくり、これからの国立大学附属学校園の在り方などについて情報交換を行い、それぞれのPTA活動のヒントを得る貴重な機会である。

「参加者全員が、少なくとも1つだけでも〝得るもの〟を持って帰っていただきたい…」

それが全国大会実行委員全員の強い思いであり、そのような大会にしなければならないという責任もある。その結果は今号の紙面の通りであるが、ここからも何か〝得るもの〟を見つけていただければ幸いである。

一方、私たちは偉大な方を失ってしまった。今年度全附P連顧問の小塚泰博さんが全国大会直前にお亡くなりになられた。第7回大会では研修委員長、第8回大会では実行委員長としてメンバーを導いていただき、今年の大会準備でも、悩み戸惑う私たちを叱咤激励し、強いリーダーシップで指導していただいた。

附属学校の理解と周知を基本に、充実したプログラムを盛り込んだ近年の全国大会のスタイルは、小塚さんが作り上げたといっても過言ではない。それだけ子どもたちの事、附属学校園の事、PTAの事を常に考え、行動されていたのである。

本当に残念で仕方がない…。今の私たちができることは、小塚さんの附属に対する強い思いを引き継ぎ、立ち止まらず前に進むこと。小塚さんへ深い感謝の気持ちを込めて…合掌

（北島　一人）

全国国立大学附属学校園の幼児・児童・生徒の保護者の皆様へ

この保険は全国国立大学附属学校PTA連合会の団体保険です。

平成30年度 中途加入受付中

カンガルー保険のご案内

ただ今募集中!

詳細につきましては、パンフレットをご覧ください。

任意加入制度　24時間補償

約50％割引
全国国立大学附属学校PTA連合会が窓口の団体契約なので、保険料が約50％割安です。
・団体割引：30％
・損害率による割引：25％適用

24時間補償
お子様を取り巻く様々なリスクに対応した安心のための24時間補償制度です。

簡単・便利！
・保険料のお支払は、便利な「口座振替方式」
・更新のお手続きは、便利な「自動更新」です。

保険期間　平成30年４月１日午後４時から平成31年４月１日午後４時まで１年間
※随時ご加入いただけます。（お申込日にかかわらず、補償は平成31年４月１日午後４時に終了します。）
※ご加入ご希望の方は、取扱代理店までお問い合わせください。

加入対象者　①全国国立大学附属学校園に在籍の幼児・児童・生徒
②本制度にご加入いただいた上記①の兄弟で、公・私立の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に通われている幼児・児童・生徒（ご加入時に満3歳以上から満18歳以下の方に限ります。）

加入手続き　パンフレット差込の加入依頼書にご記入・ご捺印（銀行届出印）のうえ、返信用封筒にてご返送ください。

申込締切日　随時ご加入いただけます。（お手続きの翌月1日（午後4時）からの補償開始となります。）
※パンフレットのご請求、保険料につきましては、取扱代理店までお問い合わせください。

【引受保険会社】（幹事保険会社）東京海上日動火災保険株式会社
（担当課）公務第二部文教公務室 〒102-8014 東京都千代田区三番町6－4　TEL:03－3515－4133　FAX:03－3515－4132　平成30年4月作成 18-T00410

全員加入制度　※個人での加入はできません。

1 園児・児童・生徒、教職員の皆様のケガなどを補償する
園児・児童・生徒・教職員総合補償制度
（学校契約団体傷害保険、賠償責任保険PTA特約）

2 園児・児童・生徒、教職員の皆様を犯罪事故からお守りする
犯罪被害事故見舞補償制度
（傷害総合保険）

3 PTA活動に参加中のご両親・教職員の皆様のケガや賠償事故を補償する
PTA活動総合補償制度
（普通傷害保険PTA団体傷害特約、賠償責任保険PTA管理者特約、生産物特約）
熱中症危険補償特約セット

保険期間　平成30年６月１日午後４時から平成31年６月１日午後４時まで
※「カンガルー保険（全員加入制度）」は全国国立大学附属学校PTA連合会を保険契約者、損害保険ジャパン日本興亜株式会社を引受保険会社とし、学校契約団体傷害保険、傷害総合保険、PTA団体傷害保険、賠償責任保険（PTA特約、PTA管理者特約、生産物特約）をそれぞれ組み合わせて加入する補償制度のペットネームです。
※この広告は概要を説明したものとなります。詳細はパンフレットをご覧くださるか、取扱代理店または損保ジャパン日本興亜までお問い合わせください。

【引受保険会社】損害保険ジャパン日本興亜株式会社
団体・公務開発部 第三課　〒160-8338 東京都新宿区西新宿１-26-1　TEL:03－3349－9588　FAX:03－6388－0162
SJNK18-01501

カンガルー保険・取扱代理店のお問合せ先
この広告はこども総合保険団体契約の概要についてご紹介したものです。ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。ご不明な点等がある場合には、代理店までお問い合わせください。

《北海道・東北・関東・北信越・四国地区》
株式会社 第一成和事務所
東京都中央区日本橋久松町11-6
日本橋TSビル 8F
0120-100-492

《東海・近畿・中国・九州地区》
海上商事 株式会社
東京都渋谷区代々木2-11-15
新宿東京海上日動ビルディング
0120-745-748